

1 絵画資料の発問の分類化

前回、社会科教科書に掲載されている「自由民権運動の演説会」（図1）の絵画資料について、「皆さんなら、どのように解釈するだろうか。そして、どのような発問や指示を出すだろうか。」ということを示唆した。

この絵画資料は、明治時代の新聞に掲載されたものであり、教育出版以外の他の小学校社会科教科書にも掲載されている。その点では自由民権運動を学習する際の定番資料といえるであろう。第6学年を担当した教師であれば、誰しも扱ったことがある資料である。

しかしながら、どのように発問をしたらよいのか迷ってしまう教師もいるのではないかと推測する。発問を準備する過程で、教師なら次のようなことを考えるのではないだろうか。

- ・「気づいたことは何か」と聞いても、時代背景が分からないと気づきが少ないのではないか。
- ・グラフ資料と同じように基本的な項目の読み取りをさせる必要があるのではないか。
- ・事実は読み取らせられると思うが、深い読み取りをさせるためにはどのようにしたらよいのか。
- ・この資料を授業のどの場面で活用するかによっても、発問は違うのではないか。
- ・そもそも自分自身がこの絵画資料に対して教材研究が必要である。

このような教師に対して、解決の手がかりになるのが、絵画資料の発問の種類分類化である。先行研究として、池野範男氏の「歴史理解にける視点の機能(1)－絵画資料理解の分析を通して－」がある(1992)。ここで池野氏は、ファウストの記号論的アプローチと結び付けて、絵画資料理解の認知方略として「画像の認知と把握」「記号としてのひと、もの、事柄の解説」「描写内容の歴史的状況への関連づけ」「制作者の意図の解説」の4段階を示している。この分析過程は、教師が絵画資料を読解する観点としても用いることができるのではないかと考え、これをもとに次のように絵画資料の発問を分類した。

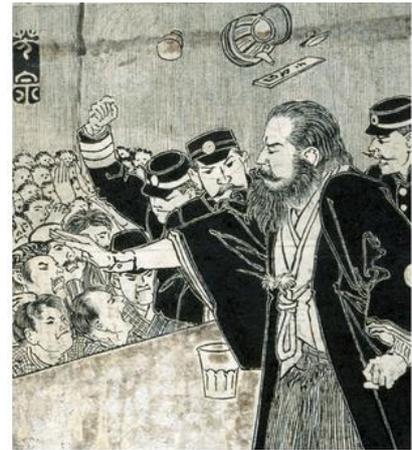


図1 「自由民権運動の演説会」
（『小学社会 6上』教育出版）
p. 100）（東京大学法学部附属
明治新聞雑誌文庫所蔵）

- 1 絵画資料に描かれているものを確認する発問
- 2 絵画資料に描かれているものを読み取る発問
- 3 絵画資料と歴史的事実との関連に関する発問
- 4 絵画資料制作者の意図に関する発問

1は絵に「何が描かれているのか」を確認する発問である。たとえば、「何が見えますか」といった発問が考えられる。この発問であれば、資料の読み取りが苦手な児童でも発言しやすく、積極的な参加が期待できるであろう。それだけでなく、話し合いの過程で資料に描かれているものについて時間をかけて見ることができる。

2は実際の絵の状況について理解させる発問である。たとえば、「〇〇は何をしているのでしょうか」といった発問が考えられる。これは絵に描かれている歴史的事実を理解するうえで基礎となる発問であり、本文の記述と照らし合わせながら考えさせることが必要となってくる。

3はその資料の読み取りに不可欠な発問であり、学習のねらいに直結するものである。たとえば、「なぜ、〇〇しているのでしょうか」といった発問が考えられる。資料の深い読み取りに関わる発問ともいえる。

4は絵が何の目的で描かれたかを問うものである。たとえば、「この絵を描いた人が伝えたかったことは何か」といった発問が考えられる。これについては、教師が絵画の主題について教材研究によって把握しておくことが前提になる。

2 絵画資料の発問の調査

先の「自由民権運動の演説会」(図1)の絵画資料について、I市の社会科教育研究会において小学校教師22名を対象としたアンケート調査(連載第4回の調査と同時)を行った。調査内容は、次の2点である。

- ① 発問の内容とその意図(どのような発問で読解をさせるか。意図も記述。)
- ② 発問の構成(発問を順番に記述。)

合計で70件の発問がアンケートに記入された。1名あたり平均3.2件である。それらを先に示した4つの発問に分類化し、整理をしたのが表1である。

種類別に見ると、「3 絵画資料と歴史的事実との関連に関する発問」が最も多く、発問全体の6割近くを占めた。22名中21名がこの発問を記入しており、この3のみで発問を構成している者も6名いた。この種類の発問は、先に述べたように学習のねらいに直結するものであり、ほぼ全員がこの発問を組み入れていることは学習上適切であるといえる。

その前提になるのは「1 絵画資料に描かれているものを確認する発問」と「2 絵画資料に描かれているものを読み取る発問」である。それらを通して、描かれているものの確認や読み取りを行ったうえで、学習のねらいに迫る発問を行うことが必要と考える。それというのも、歴史を学習した教師にとっては自明のことであっても、時代背景が未知の児童にとり、そもそも描かれ

ている人物が何者かが不明な場合もあるからである。先の絵でも「警官」「聴衆」は確認できても、「弁士」というのは児童にとってわかりにくい。その点で、1の発問数が5件と少ないのは、検討していかなければいけない部分である。また、聴衆が誰に対して抗議をしているのか、警官が注意しているのは誰に対してなのかを読み取らせないと、3の発問が焦点化しなくなる恐れがある。その点でも、基本的な読み取りを意図する1と2の発話の準備をしておくことが絵画資料の読解力の基礎となるのであり、もっと重視されるべきであろう。

表1 絵画資料の発問数（のべ数）と割合、主な発話例（n=22）

発問の種類	発問数 (割合)	記述された発問例
1 絵画資料に描かれているものを確認する発問	5 (7.1%)	・誰がいるでしょう。服装は。 ・どこでしょう。
2 絵画資料に描かれているものを読み取る発問	24 (34.3%)	・何をしていますか。 ・何が起きていますか。 ・どんな状況ですか。
3 絵画資料と歴史的事実との関連に関する発問	41 (58.6%)	・なぜ、こんなことになっているのでしょうか。 ・演説する人、警察、聴衆は何と言っていますか。 ・やかんや茶碗は誰に向かって投げたのか。 ・民衆はどちらの側の立場かな。
4 絵画資料制作者の意図に関する発問	0 (0%)	なし

今回は、引き続き、アンケート調査で得られた発問例をさらに分析していく。特に「4 絵画資料制作者の意図に関する発問」と発問の構成を中心に述べていきたい。

※参考文献

- ・佐藤正寿・山田智之(2019)「小学校6年生社会科における絵画資料の読解に対する教師の意識と、絵画資料読解場面における発話に関する考察」(東北学院大学教育学科論集 第1号)
- ・池野範男(1992)「歴史理解にける視点の機能(1)－絵画資料理解の分析を通して－」(全国社会科教育学会『社会科研究』第40号) ※この中で池野氏は実際に自由民権運動の演説会の絵画資料を4段階に基づいて分析をしている。